ジャイトゥア儀礼にみる社会変化

―ボージプリー文化圏の事例から―

宮城学院女子大学学芸学部人間文化学科　八　木　祐　子

はじめに

本稿では、北インドのボージプリー（*Bhojipurī*）語文化圏の女性の儀礼とそのさいにうたわれる民謡についてとりあげる。ボージプリー語は、北インドで話されるヒンディー語の東部方言であり、ウッタル・プラデーシュ（*Uttar Pradesh*）州東部を中心として、マッディヤ・プラデーシュ州の北部、ビハール州の西部とネパールの南部で話され、話者人口は１千万人以上にものぼる。この文化圏の人々は、デリーやムンバイへの移住だけでなく、海外への移民も多い。フィジーやカナダのインド移民の多くはボージプリー語圏の出身者であり、儀礼や民謡にはボージプリー語圏の影響がみられることが報告されてきた。その内実は多様にもかかわらず、ヒンディー語文化圏と一括して論じられてきた。これまでボージプリー語に関する言語的研究はあるものの、ベンガルやタミルなどインドの主要な文化の研究に比べて、ボージプリー文化に関する研究は極めて少ない。

ボージプリー語文化圏は、民謡の豊かな地域として知られている。男性も季節の歌やカーストと関わる歌などをうたうが、女性は季節や労働の歌だけでなく、婚姻儀礼、出産儀礼などの通過儀礼、女神の祭礼、ブラタ（*Vrata*）と呼ばれる家族の長寿を祈る儀礼にさいして、男性に比して数多くの歌をうたう。儀礼には、それぞれの特定の歌がともない、リズムや歌詞の内容も多種多様である。ヒンドゥー教徒の儀礼には女性しか参加できないものも多く、これまで女性たちがうたう民謡に注目されてこなかった。女性の民謡は口頭伝承であり、資料化されていない。

インド社会が、1991年の経済自由化以降に大きく変化し、農村地域にも1990年代半ばからその影響が及ぶなかで、女性の儀礼や口承伝統、民謡自体も大きく変化している。儀礼自体のあり方も変化し、従来、女性たちがうたってきた歌は、読み書きのできない60代以上の高齢女性から若い世代に歌い手が交代するなかで、失われつつある。このようななかで、女性の儀礼や民謡を記録し、資料化していくことには緊急性がある。本稿では、女性のおこなう代表的な儀礼であるジャイトゥア儀礼をとりあげ、儀礼や民謡の変化をみていきたい。

Ⅰ．　調査地域の概要

1.　調査地域について

私の調査地域の農村は、ウッタル・プラデーシュ東部アザムガル県（*Azamgarh District*）に属し、ヒンドゥー教の聖地ワーラーナシー（*Vārānasī*）から、北に100キロほど行ったところにある。主要な産業は農業で、コメとコムギ、オオムギ、マメ類をつくり、とくに、サトウキビからつくった黒砂

糖を市場で売って現金収入を得ている。

調査地域の住民は、ほとんどがヒンドゥー教徒であり、浄・不浄の宗教的ランキングにもとづくカーストのいずれかに属している。私が、とくに、調査対象としている人々はヤーダヴ（*Yādav*）で、伝統的には牛乳の販売や牛飼いを職業として、現在は農業に従事しているものが多い。ヤーダヴは、この地域で支配的な地位を占めている地主層のタークルにつづき、独立後、社会・経済的に主要な位置を占めるようになった。アザムガル県のなかで私が調査を主におこなったのがS村である。S村は、ウッタル・プラデーシュ州東部では比較的小規模の農村であり、約400人の人々が住み、その多くをヤーダヴとチャマールが占める。チャマールは皮革処理を伝統的な職業としているが、現在では、ほとんどが小作農をおこなっている。

2. ボージプリー民謡の種類

ボージプリー文化圏の民謡については、1970～1980年代に、Singh、Archer や Henry などがまとめたものがあるが、婚姻儀礼のさいの民謡など、一部の儀礼の歌をとりあげており、部分的なものである［Singh 1979；Archer 1985；Henry 1988］。また、Pinchman がワーラーナシーでクリシュナ神を祀る儀礼や民謡について論じているが、断片的なものにとどまっている［Pinchman 2005］。Wadley は北インドの民謡や儀礼全体について考察しているが、一部の資料だけをもちいており、コンテキストが把握できない［Wadley 1994］。本稿でとりあげるジャイトゥア儀礼に関する研究自体も極めて少ない。

調査地域でうたわれる民謡には多くの種類があるが、基本的には、労働のさいにうたう歌、宗教的な讃歌、特定の集団がうたう歌、季節の歌、儀礼のさいにうたう歌などがある［八木 2018a］。内容は、恋愛、家族関係、神々の物語、哲学的な思弁など多岐にわたる。杵をついたり、臼をひいたり、田の草取りをするなど、労働のさいにうたう民謡は、ジャーター・カー・ギート（*jātā kā gīt*）と総称される。2000年以降、製粉機の導入や農業の機械化により、杵つき歌や農作業の歌は、めったに聞かれなくなってきている。

宗教的な讃歌には、バジャン（*bhajan*）やキールタン（*kīrtan*）があるが、いずれも神をほめたたえ崇拝する歌であり、バクティ思想との関連がみられる。特定の集団がうたう歌には、ヤーダブのうたうビラハー（*birahā*）やアラハー（*alahā*）という英雄譚、カハールのカハルワー（*kaharwā*）などのカーストごとにうたう歌の他に、呪術師が悪霊をはらうためにうたうパチャラー（*pacharā*）とよばれる歌もある。映画の挿入歌はフィルミー（*filmī*）とよばれ、若者の間で親しまれており、そのリズムや歌詞が従来の民謡にとりいれられている。

季節の民謡には、バーラー・マーサー（*bārāh māsā*）と呼ばれる12か月の歌がある。とくにファーグン月（2～3月）にうたうファグアー（*phaguā*）と、サーワン月（7～8月）にうたうカジュリー（*kajrī*）がよく知られている。ファグアーは春を迎え、新年を祝うホーリー祭のときにもっともうたわれる。女性たちは毎晩集まって、春を迎える喜びやラーマ神とシーター神の恋物語などのヒンドゥー教の神々の物語をうたう。カジュリーは、とくに雨季の開始をつげるナーグ・パンチャミーという祭りでうたわれる。大木に木製のブランコを吊るし、数人の女性たちがその横揺れのブランコに揺ら

れながら、哀愁をおびたメロディーでうたう。

儀礼の歌には、誕生儀礼におけるソーハル（*sohar*）や婚姻儀礼におけるビバーフ・カー・ギート（*vivāh kā gīt*）など、女性のうたう民謡がどの地域でも知られている［八木 2016］。後述するジャイトゥア儀礼は、子どもの成長を祈る儀礼であり、ソーハルが女性たちによってうたわれる。

ジェンダーによる違いをみていくと、男性はバジャンやキールタンなどの宗教的讃歌やカーストの歌をうたうことが多く、リネージや村落をこえて、民謡の好きな愛好者が集まってうたう。男性たちは歌だけでなく、ハルモニウム（手風琴）、ドーラク（太鼓の一種）、マンジーラー（シンバルの一種）などの楽器をもちいる。

これに対し、女性は祭りや儀礼のさいに村落やリネージごとに集まってうたい、とくに、通過儀礼においては、女性の歌は欠かせない要素となっている。出産儀礼のさいには、子どもが生まれたという情報が伝わると、毎晩、リネージの女性たちが集まって、男子誕生を祝うソーハルをうたう。婚姻儀礼のさいには、女性の歌が儀礼の進行に不可欠であり、時には踊りが加わったりする場合がある。歌い方は、女性の場合も男性の場合も２組に分かれ、前の組がうたった歌を後の組が繰り返す形をとる。このように、女性のおこなう儀礼と歌の関わりは深いが、ここでは女性がおこなう代表的なブラタ儀礼についてみていく。

Ⅱ．　ジャイトゥア儀礼と女性

1.　儀礼と女性

⑴　既婚女性と儀礼

女性たちは、母から娘へ、姑から嫁へ、儀礼と歌を伝承していく。儀礼の主要な担い手は既婚女性である。調査地域においては、家族やリネージの繁栄をもたらすものが「吉」とされ、家族やリネージに災いをもたらすものが「凶」とされる。結婚して夫や子どものいる女性は、「吉なる女性（*maṇ-galānalī*）」とされ、婚姻儀礼などでは、歌をうたい、パフォーマンスを演じることによって豊饒性とかかわる。一方で、子どもを生むことができず、家やリネージの繁栄につながらない寡婦や不妊の女性は「凶なる女性」とされ、婚姻儀礼などの吉兆とされる儀礼には参加できない［八木 2015］。

このように、儀礼をおこなうのは、すべての女性でなく、「吉なる女性」、それも既婚女性が中心となる。女性は男性に比べてシャクティ（*śhakti*）が強く、夫や子どもの成長を願い、家族やリネージの繁栄を担うことができる。シャクティとは、宇宙を動かす創造的力、エネルギーであり、調査地域では生命を生み出す力と認識され、女神信仰とも深い関わりがある［八木 2018b］。

シャクティという吉なる力をもつ既婚女性が、家庭祭祀、通過儀礼、ブラタ儀礼（夫や子どもの健康・長命を祈る）の担い手となり、儀礼における吉性を増し、子孫繁栄や北条力をもたらす役割を担う。ブラタ儀礼には、シヴァ神への礼拝をおこなうシヴァ・ラートリーや雨期におこなわれるナーグ・パンチャミーなどがあるが、そのブラタ儀礼の代表的なものがジャイトゥア儀礼である。

⑵　ジャイトゥア（*Jaitoua*）儀礼の概要

ジャイトゥア儀礼は、サンスクリット語でジービット・プットリカ・ブラット（*Jīvit Putrika Vrat*）

と呼ばれ、地域によっては、ジティヤー（*Jitiyā*）とも呼ばれる。子供の成長を祈る女性たちの儀礼で、男の子をもつ女性たちが参加し、男性は、基本的に参加しない。9 月半ば、雨期の終わりから秋頃の、クアール（*Kuār*）月の黒分 8 日目におこなわれる儀礼である。この儀礼には、シヴァ・マーイー（*Siva Māī*）という女神が関わり、その女神の力とされるシャクティを、儀礼をおこなうことで授かり、子どもたちを守る。

調査地域の代表的な女神には、村を守る女神として、カーリー・マーイーなどが知られ、特定親族の守り神として、ドゥルガー・マーイーやバワニ・マーイーが信仰されている。なかでも、病気を引き起こす女神として、7 姉妹が知られるが、その代表的なものが天然痘を引き起こすとされるバガワティー・マーイー（ヴィンデイヤチャールに住むとされる女神）があり、シヴァ・マーイーも 7 姉妹の 1 つである［八木 2015］。もっとも、調査地域ではシヴァ・マーイーは、きちんと拝んでいれば、病気を引き起こすことはめったになく、むしろ子どもたちの成長を見守る女神であると言われている。

3. ジャイトゥア儀礼の次第

⑴ 1 日目の儀礼

既婚女性は朝から断食し、通常の家事や農作業をおこなう。なかには水も飲まないものもいる。夕方、沐浴して、新しいサリーに着替え、井戸に祀ってあるシヴァ神の像に祈る。各家庭では、女神にささげる供物や儀礼で使うものの準備をおこなう（写真 1）。たとえば、女神に供物としてささげる甘いお菓子やバナナなどの果物、サリー、ウルド豆、チャンナ豆、コメ、ギー、ジャイトゥアの紐、ネヌアの葉、綿の実、バリヤールという枝、ランプ、ゴーバル（牛フン）などである。近所の女性たちが誘いあって、儀礼の場所に向かう。小さな子どもたちもついていく（写真 2）。

写真 1

写真 2

儀礼の場所につくと、既婚女性たちは、シヴァ・マーイー女神の神像をつくる（写真 3）。ゴーバルで神像の形をつくり、米、シンドゥール（既婚女性が髪の分け目に塗る赤い粉）をつける。準備ができると、交代で、歌（*gīt*）を 5 つか 7 つ歌い、物語（*kisā*）を 5 つか 7 つか語る。いずれもヒンドゥー教では吉兆とされる奇数である（写真 4）。

写真 3

写真 4

ランプの煤で、カジャールという眼のまわりに塗る墨をつくる。既婚女性は、交代で、歌をうたい、物語を語るごとに女神に祈り、サリーなど供物をささげる。「シヴァ・マーイー、シヴァ・マーイー、私はあなたの足に触ります。あなたのプラサード（供物）を食べてください。ターリー（大皿）のミルクを飲んでください。私に祝福を与えてください。」と祈る（写真 5）。2 時間ほどして儀礼は終了し、女性たちは、暗闇のなか、ランプをターリーに載せてともし、歌をうたいながら、家にもどる（写真 6）。

写真 5

写真 6

⑵　2 日目

翌朝、暗いうちに、女性たちは儀礼の場に集まり、1 日目と同様に、シヴァ・マーイーに対して儀礼をおこなう。女神に供物をささげ、歌をうたい、物語を語る（写真 7）。儀礼が 1 時間半ほどで終了すると、既婚女性たちは、互いに、既婚女性の印であるシンドゥールという赤い粉を髪の分け目につけあう（写真 8）。

写真７

写真８

また、子どもの目の下部にカジャールを塗る。カジャールは、目を大きく見せるとともに、目から入るという悪霊の侵入を防ぐとされる（写真９）。また、ジャイトゥアの紐を子どもの首につけ、シヴァ・マーイーのシャクティをもらう（写真10）。

写真９

写真10

Ⅲ．　変化するジャイトゥア儀礼と民謡

1.　民俗歌謡の変化

1980年～90年代の民謡は、事例１のように、素直に息子の誕生を祝う歌が大半を占める。事例２のように、ラーマ神やクリシュナ神などヒンドゥー教の男性神の誕生になぞらえて男子の誕生を祝う歌が多い。私の調査地域では、クリシュナ神の誕生よりも、ラーマ神の誕生を祝う歌が多いのは、ラーマ神の誕生地とされるアヨーディヤが調査地域に近いためであろう。

父系制のヒンドゥー教社会では、後継ぎとなる息子の誕生が何よりも重要である。ヒンドゥー教徒は輪廻転生を信じており、長男は祖先祭祀をおこなう義務があり、祖先がより良い来世に生まれ変わるよう、毎年、祖霊祭をとりおこなう。事例３には、「子どもよ、よく来た、子孫を残すために」と、

後継ぎが生まれた喜びの様子がうたわれている。

＜事例１　1980年収集＞

息子が生まれた、家の財産を使うために。美しい（息子が生まれた）。
その息子が（父方の）おばあさんの膝にすわると、（父方の）おばあさんの膝にすわると、
タキマン（穀物を貯蔵する大きな壺）の小麦を使うようになるでしょう。美しい（息子が生まれた）。
その息子が自分のお父さんの膝にすわると、お父さんの膝にすわると、
トケラ（ざる）に入っているもの（衣類など）を使うようになるでしょう。美しい（息子が生まれた）。
息子が生まれた、家の財産を使うために。美しい（息子が生まれた）。
その息子が（父方の）叔母さんの膝にすわると、叔母さんの膝にすわると。
自分の兄弟から甥が生まれた。美しい（息子が生まれた）
手にはめる指輪を私はもらうでしょう。美しい（息子が生まれた）。
息子が生まれた、家の財産を使うために。美しい（息子が生まれた）。
その息子が（母方の）おばあさんの膝にすわると、（母方の）おばあさんの膝にすわると、
畑を（嬉しくて）売ってしまうでしょう。美しい（息子が生まれた）。
女の悪魔でさえも、可愛がっている。美しい（息子が生まれた）。
息子が生まれた、家の財産を使うために。美しい（息子が生まれた）。　（後略）

bābū janamalai ghar lutāvan bhaiyā mohanā ｜
jau re horilavā baiṭhe ājī jī ke godiyā are ājī jī ke godiyā ｜
ṭakimaṇ makai gohuā chukāvai bhaiyā mohanā ｜
jau re bābūlvā baiṭhe apne bābū jī kī godiyā are bābū jī kī godiyā ｜
ṭokerā oṭharvā luṭāvai bhaiyā mohanā ｜
bābū janamalai ghar lutāvan bhaiyā mohanā ｜
jau re bābūlvā baiṭhe apne phūā jī kī godiyā are phūā jī kī godiyā ｜
bhaiyā se bhatījavā janamalai bhaiyā mohanā ｜
haṭh sonai kai kanganavā hamarā bhairai bhaiyā mohanā ｜
bābū janamalai ghar lutāvan bhaiyā mohana ｜
jau re bābūlvā baiṭhe apne nānī jī kī godiyā are nānī jī kī godiyā ｜
bigahā bisavā mor bikainai bhaiyā mohanā ｜
dainī ke nāpiyār bhaiyā mohanā ｜
bābū janamalai ghar luṭāvan bhaiyā mohanā ｜

＜事例２　1980年収集＞

ラーマチャンドラが生まれた。チャイト月のラーマナオーミー（ラーマ神の誕生日）の祭りのときに。
臍の緒を切りに、産婆が来た（注 1）。

お金をもらいます。アーカット（米や麦）をもらいます。他にも、もらいたい。
金の鎌が欲しい。男の子が長生きするように。
ラーマチャンドラが生まれた。チャイト月のラーマナオーミーの祭りのときに。
男の孫を見に、（父方の）おばあさんも来た。
手の飾りものをもってきた。足の飾り物をもってきた。
他にも、首の飾りものももってきた。孫が長生きするように。
ラーマチャンドラが生まれた。チャイト月のラーマナオーミーの祭りのときに。
（宗教的な）名前をつけに、パンディットが来た。
アーカットやシダー（布施）をもらいにきた。
他にも、金の万年筆をもらいにきた。男の子が長生きするように。
ラーマチャンドラが生まれた。チャイト月のラーマナオーミーの祭りのときに。（後略）

rāmchaṇdra janam liye chaitrāmnaumī ｜
nārā chinan ke ḍhagrin āi ｜
paisā lenī ākhat lenī auro kuch māngai ｜
sone ke hasiyā māngai bābūl kī baḍaiyā ｜
rāmchaṇdra janam liye chaitrāmnaumī ｜
potā dekhan ke ājī bhī āin ｜
are hāthey lāin gore lāin aure kuch lāin ｜
gale ke tabījiyā lāin bābūl kī badaiyā ｜
rāmchaṇdra janam liye chaitrāmnaumī ｜
sāit pūchhan ko panḍit āin ｜
are ākhat lenai sīdha lenai ｜
aur kuch māgai sone kī kalamiyā māgai bābūl kī badaiyā ｜
rāmchaṇdra janam liye chaitrāmnaumī ｜

＜事例３　1980年収集＞
赤いおもちゃと黄色いおもちゃで遊んでいる、子どもが。
来て、お姉さんの膝で遊んでいる、子どもが。
膝にのせてキスをしている、おじいさんが。
子どもよ、よく来た。子孫を残すために。
赤いおもちゃと黄色いおもちゃで遊んでいる。
来て、お母さんの膝で遊んでいる、子どもが。
膝にのせてキスをしている、ラディシャームが。
子どもよ、よく来た。子孫を残すために。
赤いおもちゃと黄色いおもちゃで遊んでいる。（後略）

lāl ghun ghunavā piyar ghun ghunavā kherat ｜
ainai bahinī kī godiyā khelat lalanā nā ｜
kaniyā uṭhāke chummā lenai bābā kī bhale lalanā nā ｜
ailā banśh jagavalā bhale ho lalanā nā ｜
lāl ghun ghunavā piyar ghun ghunavā kherat ｜
ainai ammā kī godiyā khelat lalanā nā ｜
kaniyā uṭhake chummā lenai Radhysham ki bhale lalanā nā ｜
ailā banśh jagavalā bhale ho lalanā nā ｜
lāl ghun ghunavā piyar ghun ghunavā kherat ｜

2010年代半ばになると、事例４のように、ラーマ神になぞらえて誕生を祝福する歌をうたったり、事例５～７のように男子誕生を素直に喜ぶ歌もあるが、事例８、９のように家族関係についてうたう歌が増えてきた。

＜事例４　2017年収集＞
早朝、薄明の頃、鹿が鳴いています。
姉妹よ、すぐに生まれました、赤ちゃんが。
アンガン（家の中庭）でソーハルを歌っています。
早く走ってください、床屋が隣の家に。
床屋よ、ラーム（ラーマ神）に伝えてください、赤ちゃん（息子）が生まれたと。
４つの柱がある池で、ラームがダトワン（ニームの枝を使った歯磨き）をしています。
床屋よ、誰の子どもが生まれたという知らせをもってきたのですか（注２）。
その知らせはとっても美しい。（後略）

hoṭai bhinahiyāṃ pahaphāṭai mṛig boliyā bolainai ho ｜
bahinī bichuḍī hī parainai nandalāl anganavāṃ uṭhai sohar ho ｜
dauḍ tahī nauvā se bariyā parose bariyā na ho ｜
bariyā rām kai khabar janāvā tau nandalāl janamai na ho ｜
cāri cāri khambhā kai pokharavā tau rām datuan karai ho ｜
nauvā kekar locana lai ke ailā locana baḍā sundar ho ｜

＜事例５　2017年収集＞
川のそばに、１本のカダム（アーモンド）の木があります。
息子（ラーム）がその木の上に座っています。オウムが美しく鳴いています。
何をカラスがナイハル（実家）からもって来ましたか、ハルディ（ウコン）をもってきました。
カラスがどんないい知らせをもってきましたか。美しく鳴いています。

私はナイハルから来たのではありません、ハルディをもって。
ラーニー（女王）よ、今日から9か月、マハリヤ（宮殿）で、ソーハルを歌います。
早朝、薄明のころ、息子が生まれました。
姉妹よ、音楽が鳴っています、アンガンで、祝福してソーハルを歌いだします。

nadiyā khināre kadamā ek peḍavā lalanā ｜
tehi par baiṭhe suganavā tau boliyā suhāvan ho ｜
kiya kāgā naihare se āvailā haradī paṭhāvelā ho ｜
kāgā kavan sagun laike ailā tau boliyā suhāvan ho ｜
nāhī ham naihare se ailā haradī paṭhaila ho ｜
raniyā āj ke navae mahīnavā mahaliyā uṭhai sohar ho ｜
hotai bhinsaharā pahaphātai tau horilā janam lihalai ho ｜
bahinī bājai lāgai angane bahāiyā uṭhan lāgai sohar ho ｜

＜事例6　2017年収集＞
アンガンにトゥルシー（聖なる樹）を植えます。そのトゥルシーに祈ります。
トゥルシーよ、私に男の子が生まれたら、黄色い（めでたい色）サリーを供えます。
8か月（が終わって）、9か月目が始まりました。そして、息子が生まれました。
姉妹よ、音楽がなっています、アンガンで、祝福してソーハルを歌います。
マチアに座って、姑よ、お嫁さんがお願いしています。
姑よ、すぐにください、私に黄色いサリーを。トゥルシーに供えます。
あなたは、私の嫁です。あなたは、私の嫁です。
嫁よ、ナイハル（実家）から黄色いサリーをもらってください。トゥルシーに供えます。
私の家の後ろの床屋の息子を呼びました。
床屋よ、私のナイハルから黄色いサリーをもらってください。トゥルシーに供えます。
ナイハルから黄色いサリーをもらってきました。トゥルシーに供えます。（後略）

angane me tulasī lagaibai tau tulasī manaibai ho ｜
tulasī jab hamare horilā janamihai piyariyā caḍaibai na ho ｜
āṭh mahīnā nau biitai tau horilā janam lihanai ho ｜
bahinī bājai lāgal angane vadhaiyā uṭhan lāgai sohar ho ｜
maciyā hī baiṭhainī sāsū tau vahuari araj karai ho ｜
sāsū dainā detū hamake piyariyā tau tulasī caḍhaibai na ho ｜
tūhī morī bahuari se bahuari ṭūhī morī bahuari na ho ｜
bahuari naihare se piyarī magavatū tau tulasī caḍhawatū na ho ｜
more pochuaravā nauvā beṭā hī caḍi āvai na ho ｜

nauwā naihare se piyarī liyāwā tau tulasī caḍaibai na ho ｜
nai hare se payarī magawanī tau tulasī caḍawanī na ho｜

＜事例７　2017年収集＞
1 つめの花がブリンダーバン（クリシュナ神の生誕地）に、2 つめの花がカーシー（ベナレス）に。
私の姉妹よ、3 つめの花が咲いています、私のナイハル（実家）に、4 つめの花がサスラール（婚家）に。
そのなかから、1 つの花をもらってきてください。アンガンの真ん中に植えます。
私の姉妹よ、その花のなかに、男の子を（息子）眠らせます。
男の子はとっても美しいです。
外から来ました、舅が。とっても怒って話しています。
お嫁さんよ、誰々がブラタをしていますか。男の子はとっても美しいです。
ティージに断食、チョウティアにも、そしてナワラータンにも。
舅よ、もう 1 度、私は断食します、ジャイトゥアに。男の子はとっても美しいです。

ek phūl phulai vṛndābana ho dūsāra phūl kāśī na ho ｜
more bahinī tīsar phūl phūlai hamare naihar cauthā phūl sāsur ho ｜
vahī me se ek phūl magaibo ta angane bīc lagaibo na ho ｜
morī bahinī ṭehī bīc horila sutaibo horil vaṭā sundar ho ｜
bahare se āvai nai sasurū ta haḍapi taḍapi bolai ho ｜
bahuari kavan − kavan vrata rahalū horila baḍā sundar ho ｜
tījiyā mai bhūkhano cauthiyā ta avaro navarāt na ho ｜
sasurū ekṭhe mai bhūkhano jiutiyā horila baḍā sundar ho ｜

嫁・姑関係をうたった歌も内容が変化し、資料 8 のように、母と息子が嫁のことで言い争ったり、資料 9 のように、夫が自分の母親ではなく、嫁側につく歌がめだってきて興味深い。この背景として、教育を受けた若い嫁たちの家庭内での発言権が増したこと、母・息子という従来のタテの関係よりも夫婦というヨコの関係が重視されるようになったことなど、社会関係、ジェンダー関係の変化が関わっている。また、ラーマ神誕生をうたった歌にも家族関係の内容が登場し、嫁・姑関係の悩みが投影されるものも増えている。

＜事例８　2017年収集＞
最初に、ゴウナー（第 2 段階の婚姻儀礼）で来ました、夫を知るために（注 3）。
妻よ、私の母親は大変喧嘩をします。母親とあまり話をしないでください。
（小さな）土のコップ（チャイを飲むような）にいっぱい小麦を与えます。
ストヒ（貝殻のさじ）に、いっぱいダール（豆のスープ）を与えます。

姉妹よ、バブル（1センチくらいの小さな葉）の木の葉に、いっぱい塩を与えます。
そして命令します。
嫁さんよ、私の夫はバシ（前夜の残りご飯）を食べています。
バシを彼（私の夫）に与えてください。
（バシに）蓋をしておきます、姑よ、私の頭が痛いです。
パロス（食器においていたご飯）を、あなたが（あなたの夫に）食べさせてください。
誰の小作農民の娘ですか、姉妹よ（嫁さんよ）。
息子よ、誰のやせている妻ですか。今すぐに、私に答えなさい。
舅の女の子、自分の兄弟が可愛がっている女の子です。
お母さんよ、私のやせている妻です。今すぐに、答えを与えます。
息子よ、一言、言います。
私の（言うことを）受け入れなさい、嫁さんとの関係を断ってください。
息子よ、しなさい、他の結婚を、私を尊敬するような人と。

pahile – pahile gaune ahanī saiyā samujhāvai laganai ho ｜
dhāni hamarī maiyā baḍī jhagaṅluā tau onase barāy rahiā ho ｜
bharukā bhara pisān dehanī sutuhī bhar dāl dehanī ho ｜
bahinī babure ke patavā pe nūn dehanī auro phuramāy dehanī ho ｜
bahuari mor buḍhavā bāsī kai khavaiyā tau bāsī onake dhai dīhā ho ｜
topi ḍhāki navanī tau sāsū āj morā muḍavā dhamakanai paros ke khiyāy detū nā ｜
kaune haravahavā kai beṭī bahiniyā na ho ｜
pūtā kavane patari tiriyavā tau avatai mor javāb kailai ho ｜
sasurū kai bāṭī u dulārī ta bhaiyā kai piyārī na ho ｜
maiyā hamār baṭī patarī tiriyavā tau avatai javāb kailai ho ｜
pūtā ek kahan hamarā mānā ta eke choḍi nāvā na ho ｜
pūtā kai lebā dūsara biyahavā javan mor ādar karai ho ｜

＜事例９　2017年収集＞
マライ（儀礼の場）でおこなわれました、私の結婚が。コトリヤ（小屋）でゴウナーがありました。
私の夫が、そのとき、サリーの端をあげて妻をみました。美しいとわかりました。
仕事をしません、家のアンガンの。食器を磨くこともしません。
妻は台所の仕事をしません。サリーが（洗濯しないので）汚くなっています。
誰が台所の仕事をしますか、誰がバルタンを磨きますか。
私の夫よ、誰が台所の仕事をしますか、サリーはきれいです。
私の母は家のアンガンの仕事をします。姉妹がバルタンを磨きます。
私の妻よ、義理の姉妹が台所の仕事をします。サリーはきれいです。

あなたのお母さんは、（私のことを）レ（re、蔑称）で呼んでいます。悪口を言います。
夫よ、あなたの姉妹は喧嘩をします。どのようにご飯をつくってあげますか。
母を畑仕事に送ります、姉妹をサスラール（婚家）に送ります。
私の妻よ、姉妹を別の家にします（別々の家にします）。
私がご飯をつくります。サリーをきれいにします。

manḍae me bhainai mor vivāh ta koṭharī gavanā ainai ho ｜
more rājā ghughuṭā uṭhāī jab dekhai dhan ho sundar milal bāṭī ho ｜
jin karā ghar anganavā ta jin bartan mājā na ho ｜
dhan jin karā rāma rasoiyā cunar dhumil hoī jaihai ho ｜
ke karihain rāma rasoiyā ta ke bartan majihai na ho ｜
more prabhu ke nā karihain rāma rasoiyā cunar baci jaihai na ho ｜
maiyā hamarī karihain ghar anganavā bahiniyā bartan majihai na ho ｜
more dhan bhabhī karihai rāma rasoiyā cunar baci jaihai na ho ｜
maiyā tuharī re kahi bolai hai bahiniyā birahī bolihain na ho ｜
prabhū bhabhī tuharī karihain ṭhakaṭhenavā banāy ke kaise dīhai na ho ｜
maiyā ke karabai khalihanavā bahini ke sasuravā na ho ｜
more dhan bhābhī ke karabai alagavā banāy ke ham debai cunar baci jaihain na ho ｜

民謡は、女性たちがそれぞれの生活のなかでつくりだしたものであり、口頭伝承として受け継がれてきた。教育レベルがあがった現在では、若いお嫁さんのなかには、自分で歌詞をつくり、ノートにかきとめているものもおり、新たな歌を儀礼でうたい、評判が良ければ、定着することもある。

2. ジャイトゥア儀礼の変化

儀礼自体にも変化がみられる。まず、1つ目の変化は、儀礼の場の分散である。調査地域の農村では、1980年代初頭は、精霊が宿るとされるマンゴーの老木のあるウッタル・バーバーという庭に村の女性たちが集まり、儀礼がおこなわれていた。それが、1990年代後半には、3か所に分かれて儀礼がおこなわれるようになり、2009年からは7か所に分かれ、カーンダーンいう親戚を中心におこなわれるようになっている。これは、他の儀礼もそうだが、村落でのつきあい方が変化し、村全体で集まるよりもリネージごとに儀礼をおこなうことが増えていることも関わっているだろう。

また、2つめに時間の短縮もみられる。1日目の儀礼の開始がはやくなり、全体的に儀礼の時間が短縮されている。1990年代初めまでは、女性たちは食事の準備を終え、男性や子どもたちに食事を供した後、暗くなってから女性たちが集まり儀礼を始めていた。現在は、明るい時間の夕方5時過ぎに始まり、遅くとも8時半前には終了している。調査地域の近くにある都市部では、儀礼は4時半過ぎには始まり、時間ももっと短縮している。以前と比べて、核家族化がすすみ、既婚女性たちは夕食をつくる必要があるため、開始を早くし、儀礼の時間も短めになっているのだろう。これには、

儀礼の場の分散も関わっており、また、上手な歌い手や語り手が分散して減ったために早めに終わるとも考えられる。さらに、ジャイトゥア儀礼では、従来、5つの歌をうたい、5つの物語を語ることがなされてきたが、歌の比重が増え、物語が語られることが減った。これは、参加者の世代交代がすすみ、昔話を知っている人が減ったためだと思われる。

3つめに場所の聖性が薄れるという変化もみられる。1990年代以前に、ジャイトゥア儀礼を精霊が宿るマンゴーの木があるウッタル・バーバーだけでおこなっていたときは、儀礼の場には聖性が付与されていた。だが、儀礼の場が7か所に分散してからは、カーンダーンを中心におこなうこともあり、近くの場所、みんなが集まりやすい便利な場所が選ばれることになり、その場所でおこなう意味（場所の聖性）がなくなる。これとも関連しているが、「吉」·「凶」の観念も薄れている。以前は、「凶なる女性」とされる寡婦はブラタ儀礼に参加することはなかった。2010年代以降になると、寡婦の参加がみられるようになった。寡婦は、白いサリーでなく、色柄物のサリーを着て、腕輪をするようになり、服装、装飾品の変化が、2000年代半ばからみられるようになった。

最後に、儀礼に新たな要素を取り入れる動きがみられる。この背景には、教育をうけた若い世代が参加し、電子機器を使いこなせる女性たちが増えたことが関わっている。調査地域の農村では、2005年から携帯電話（モバイル）が普及するようになり、携帯電話で儀礼の歌を録音することが増えてきた。2015年からは、若い嫁たちもスマート・フォンを使用するようになり、儀礼の様子を撮影し、記録する動きがみられるようになった。さらに、2017年の儀礼では、30代の女性がインターネットで、他の地域の儀礼をみて、それを参照し、ジャイトゥア儀礼にとりいれた。北インドではみられなかった南インドのランゴールという華やかな床絵を描き、儀礼をおこなうという新たな動きがみられ、非常に興味深い現象が起こっている（写真11、12）。

写真11

写真12

おわりに

調査地域の農村女性にとっては、歌をうたうことは不満解消であり、コミュニケーションの手段でもある。とくに、私が調査をはじめた1980年代は、外出することがめったにない女性にとって、儀

礼で集まり、歌をうたい、物語を語ること、おしゃべりをすることは、最大の娯楽であった。現在は、スマート・フォンを使って、映像を楽しみ、また、町へ買い物に出るなど、他の娯楽も増えてきた。

このように、儀礼や民謡自体のあり方や位置づけが変化するとともに、民謡の歌詞に含まれた意味やメッセージ、今では失われた物が理解されなくなってきている。10～20代の若い女性は、教育を受けることで英語の歌詞をもちいたり、メディアの影響を受け、リズム自体も変化させている。世代交代が進むなかで、高齢女性が記憶しているうちに、儀礼の意味や民謡を記録しておくことは極めて重要であると考える。

＊本研究は、文部科学省、科学研究費（基盤研究 C、課題番号17K02032）「北インド、ボージプリー文化圏の民謡に関するジェンダー分析」（代表　八木祐子）の助成を受けている。

＜注＞

注 1　調査地域においては、1990年代までは、ほとんどが自宅で出産がおこなわれ、チャマール・カーストの女性が産婆（*dai*）として、出産の介助や産後の世話をおこなってきた。とくに、へその緒を切ることが、産婆の一番の仕事とされていた。産婆の役割については、［八木 1999］を参照のこと。

注 2　床屋カースト、ナーイー（*nāī*）は、村落のメッセンジャーの役割を果たし、婚約、結婚や誕生の知らせを人々に届ける役目を担っている。ナーイーの役割については、［八木 2012］を参照のこと。

注 3　調査地域の婚姻儀礼は、3 段階に分かれている。第 1 段階のシャーディーで、結婚が実質的に成立するが、儀礼後も花嫁は実家にとどまる。第 2 段階のゴウナーで、花嫁は花婿の家を初めて訪れ、3 日ほど滞在し、実家に戻る。第 3 段階の婚姻儀礼のドーゲーで、花婿と花嫁は共に生活を始める。婚姻儀礼の過程と変化については、［八木 2011］を参照のこと。

＜参考文献＞

Archer, C.
1985　*The Songs of the Bride*. New Delhi: Vikas Publishing.
Henry, O. Edward
1988　*Chant The Names Of God: Musical Culture In Bhojipuri-speaking India*.
San Diego: San Diego State University Press.
Singh, C.
1979　*Marriage Songs from Bhojpuri Region*, Jaipur: Champalal Ranka and Company.
Pinchman, Tracy
2005　*Guests at God' Wedding: Cerebrating of Kartik Among the Women of Benares*,
New York: State of New York University Press.
Wadley. S. Susan
1994　*Strugging with Destiny in Kharimpur, 1925–1984*, University of California Press.
八木祐子
1990「シーターの夢―婚姻儀礼の歌にみられる家族関係―」八木祐子編、『女性と音楽』（民族音楽叢書 第 2 巻）、東京書籍、pp.175–199
1999「ラーマの誕生―北インド農村社会の出産とからだの認識」吉村典子編、『出産前後の環境：からだ・文化・近代医療』、昭和堂、pp.198–225
2011「チャイからコーラへ―北インドの婚姻儀礼の変化」鈴木正崇編、『南アジアの文化と社会を読み解く』慶応義塾大学出版会、pp.85–107

2012 「ナーイー〈ウッタル・プラデーシュ州〉村落のメディエーター」金基淑編）『カーストから現代インドを知るための30章』明石書店、pp.69–75
2015 「第８章　北インドの女神信仰にみる社会変容―身体と儀礼のかかわりから―」粟屋利江・井坂理穂・井上貴子編『現代インド５　周縁からの声』、東京大学出版会、pp.203–224
2016 「アザムガルの民俗歌謡―婚姻儀礼と女性の歌」『多民族社会における宗教と文化』No.19、キリスト教文化研究所、宮城学院女子大学、pp.37–52
2018a 「民謡」『インド文化事典』インド文化事典編集委員会、東京書籍、p.439
2018b 「信仰と儀礼」『インド　ジェンダー研究ハンドブック』粟屋利江・井上貴子編、東京外国語大学出版会、pp.147–162